

山に親しみ山に想う (47)

一檜原村の北秋川・藤倉探訪一 (13)

(記 岡本)

武蔵五日市駅前7時40分発藤倉行バス(2023年4月22日(土))は、登山客で満杯である。弘沢の滝入口バス停で多くの客が降り、小岩で降りたのは唯一人、残った4人は終点藤倉バス停から陣馬尾根、小河内峠に行くのであろう。今回の探訪は、昨年11月12日の小岩までの探訪を繋ぐもので藤倉までを目的としている。

小岩バス停(8:24)の50m程先、左手都道脇に「華水の滝」の案内板がある。高さ25mの貴婦人を思わせる佇まいの優美な滝と誘っているが、片道30分と遠すぎるので仕方なく袖にした。案内板の先50mに架かる羽付撞橋で北秋川を右岸に渡る。橋の袂から奥秋川ビレッジを経由して標高600mまで登った先にある尾根通集落の辺りは、興味深い等高線模様をなしており、いつか歩いてみたいと思う。何軒の民家が残っているのだろうか。



羽根撞橋から先、民家は暫く途絶える。都道の左手、澄んだ北秋川は、5m程と狭く涼涼と流れてゆく。右手はセメントの法面が直立している。深緑の針葉樹帯と新緑の広葉樹帯が織りなす樹林帯の陰翳が美しい。山裾には藤の花などが散見されて、明るく、鶯の音が聞こえる。山は笑っている。

左岸沿いに架かる笹久保大橋(8:50)を渡った先に竹窪バス停がある。バス停付近に見える民家は一軒のみで、それも外観からは生活臭が感じられず、廃屋のようだ。細道を降った先の、流れの縁に民家があるのだろうか。竹窪から次の笹久保バス停に着く(9:07)。ここで北秋川は南に大きく蛇行しており、沢側の二辺と迫る山裾に囲まれた逆三角形の段丘上に笹久保集落(20軒程)が形成されている。廃屋は見られず公民館もあるが、人影は見られず静謐が漂う。逆三角形の西側の点にあたる所に、都道にくっつくようにして鳥居と産土神(うぶすながみ)の貴布祢神社社殿がある。急な石段を上ると10m四方の狭い空間に小祠が鎮座し、板碑、庚申塔、六臂の石仏、狛犬などが一隅に並んでいる。その佇まいから笹久保の住民の信仰の深さが感知される。祭神は国常立命(くにのとこたちのみこと)と猿田彦命の二柱である。境内から都道を挟んで下に見える集落を暫し見惚れてしまった。神社を後にする。

神社の先で縫里地区(小岩、尾根通、笹久保)から藤倉地区(日向平、中組、倉掛)になる。

竹窪、笹久保辺りから中組辺りまでの北秋川の流れは曲折が激しく、地図を見るとまさに蜿蜒長蛇の様相である。流れ込む支流も多い。



神社から300m程先に山王坂下バス停があり、北秋川の段丘に10軒程民家がある。地方選挙最終盤を迎え選挙カーが集落の旧道に入って支持を訴える。都道に戻ってきた選挙カーの候補者が「明日の投票、よろしくお願いします」と手を振る。ハイキング姿を見れば、村民でないことが判るのだが、当方も手を振って愛想良く応えておいた。

無人地帯が続く。北秋川に注ぐ支流に架かる留浦橋(とずら)を渡る(9:50)。奥多摩湖畔にも留浦という地名がある。留浦とは、蔓草が生い茂るという程の意味という。更に支流にかかる尾崎橋を渡った先の尾崎バス停(10:15)、次いで竹の沢バス停(10:25)を過ぎる。尾崎バス停付近で一軒の民家を見たのみで無人地帯が続くが、右岸の段丘に幾つかの民家があるが、視界を防ぐ樹木で見えなだけなのだろうか。都道を時たまサイクリストや選挙カーが藤倉方面に向かい、小型車やが逆に本宿方面に降っていく。都道脇の狭い歩道を歩く人などいなく、誰一人にも会っていない。

赤い欄干の藤倉橋で右岸に渡り(10:37)、200m先の下除毛新橋でまた左岸に出る。新橋の袂にある下除毛(しもよけ)バス停辺りからは藤倉地区(日向平、中組、倉掛)の民家が増え始める。新橋からは軒並み民家が続き、充実した山村の雰囲気醸し出されている。新橋から400m程先で北からの惣岳沢と西からの月夜見沢の合流点に着く。合流点の惣岳沢に架かるのが除毛橋で、その袂の標識には「北秋川上流端、秋川合流点まで12km」とある。橋を渡り惣岳沢沿いに少し上がると藤倉バス停がある(11:20)。バス停向かいの角地に30基程の圧倒する数の石塔、石仏、墓標群があり、山村に住む人々のその信仰の凄さ、真摯さに打たれる。



バス停向かいの家の横から小河内峠、重要文化財小林家住宅に通じる60段程の石段がある(案内板がある)。石段を上るとロープウェイが刻まれた車道に出て右に上る。10分程で春日社に出る(11:40)。幣帛を纏った大杉を両脇に伺候させた社殿は小振りながら、古色蒼然の気を湛えて威厳を放っている。社殿正面に懸かっている、立派な鼻の天狗面が妖気を放って惹きつけてくる。社殿左手の大杉の下に小林家住宅を經由し小河内峠に通じる山道がある。二組の登山者が

降りてきたが、神社には一瞥もせず降っていった。(2016年2月6日、藤倉バス停ー小林住宅ー小河内峠ー奥多摩湖いこいの道ー奥多摩湖バス停を山行、山行回数5541回、2016年2月号会報掲載を御参照)

神社を後にして、車道の100m程先にある旧藤倉小学校跡に向かった(12:00)。学校跡は車道右側の高台の広場である(標高約550m)。「東京都西多摩郡檜原村立藤倉小学校」の校名が畚め込まれた門柱が残され、自然石の「藤倉小学校跡」碑がある。広場の奥に木造一階建ての修復された瀟洒な校舎が一棟建っている。校舎入り口に「NPO法人さとやま学校東京藤倉校舎」の看板が掛かっている。現在この団体が管理しており、事務所兼活動用宿舎等として使われている。職員に校舎内を案内してもらい、今は食堂カフェに使用されている嘗ての図書館で種々お話を伺った。また当時の教科書や種々の図書、学校生活を撮った写真集を懐かしく拝見し、出していただいたコーヒー、クッキー(有料)を頂き、持参の昼食を摂った。



旧藤倉小学校の足跡に言及する。明治7年(1874)に檜原小学校第六分校の包蒙学校として寒澤寺に開校、後に北檜原尋常小学校と改称、昭和22年(1947)に北檜原小学校第二分校と校名変更、昭和41年(1966)檜原村立藤倉小学校に昇格した。その後児童数の減少傾向が著しくなった。昭和41年の84名の生徒数は10年後の昭和51年には四分の一に減少し、昭和

61年(1986)檜原小学校に統合された年に卒業生3名を送り出し閉校した。本宿の檜原小学校まで通学することになった生徒のために、従来小岩で折り返していた乗合バスは藤倉バス停まで延長され、生徒は乗合バス通学となった。

学校跡の先100mにある民家の所で車道は終わる。その先には1m幅のセメントの山道が続いている。その山道は陣馬尾根と月夜見沢の間を北上して、今は廃村になっている猿江(標750m~800m程)に至るのだが、猿江の児童は嘗てこの山道を通っていたのであろう。

旧学校跡で寛ぎの時間を過ごした後、藤倉バス停発2時過ぎのバスで武蔵五日市駅に戻った。
(了)

参考資料

「檜原村紀聞、その風土と人間」 瓜生卓造著 昭和52年6月刊

「郷土史檜原村」檜原村教育委員会 平成8年3月刊

NP0 法人さつやま学校・東京発行資料